

ペルテス病と画像

座長：服 部 義

ペルテス病と画像という主題のもとに演題が4題発表された。いずれも新しい切り口でペルテス病の病因・予後に踏み込んだ内容であり極めて興味深かった。下村哲史先生は患側大腿骨近位の骨密度が有意に低下していること、鬼頭浩史先生は術中に採取した腸骨稜軟骨組織を電顕的に検討し、軟骨細胞内に多数の脂肪滴が封入されていることを確認し、ペルテス病の軟骨細胞の機能障害を指摘した。これは骨年齢の遅延、低身長などペルテス病が持つ全身的な素因の問題の解明のヒントになろう。戸澤興治先生は発症時骨年齢が、琴浦義浩先生はMRIの骨頭内側異常像が予後に関係することを報告した。これらは手術適応の有無や方法の決定にも役立つ情報であり、今後のさらなる検討が待たれる。

片側ペルテス病患児の骨萎縮……………東京都立清瀬小児病院整形外科	下村哲史ほか
ペルテス病患児における腸骨稜軟骨の組織形態学的検討 ……………名古屋大学大学院医学系研究科整形外科	鬼頭浩史ほか
高年齢発症のペルテス病における骨年齢と予後についての検討 ……………別府発達医療センター整形外科	戸澤興治ほか
ペルテス病の予後不良因子としてのMR画像における異常像の検討 ……………京都府立医科大学大学院医学研究科運動器機能再生外科学(整形外科)	琴浦義浩ほか